

明日を拓く企業の戦略

成長する企業には独自の戦略がある。企業の今を、そしてこれからを創るその戦略に迫る

基幹工場の大和クレス長船工場



本社 岡山市中区藤原西町2丁目7-34
事業内容 プレキャストコンクリート製品の設計、製造、販売、施工
代表者 林美佐
設立 昭和39年(1964年)
資本金 8,000万円

大和クレス(株)

インフラを支える技術力で発展 デジタル化の推進が職場を改革する

プレキャストコンクリート製品のメーカーとして、開発、設計、製造、現場への搬入までを一貫して行い、徹底した品質管理体制で発展してきた大和クレス(株)。道路や農地、河川等で使用される製品を扱い、そのラインナップは1000種類以上に及ぶ。現在、中四国・近畿・九州に11の営業所と6つの工場を持つ。

現社長の林美佐氏は専業主婦からの転身。周囲に助けられながら働きやすい会社を目指した取り組み等について話を聞いた。



聞き手・執筆
井ノ上美恵子
(フリーアナウンサー)

プレキャスト製品で 人々の生活を守る

工場内で金属製の型枠に生コンクリートを流し込んで製造するプレキャストコンクリート製品。工事現場で木枠に生コンを流し込んで作る「現場打ち」が8割と言われるコンクリート業界だが、林美佐氏の祖父・林弘氏が昭和39年に創業した同社は、早くからプレキャストメーカーとして事業を展開してきた。

大きな設備投資が必要ではあったが、管理された環境で高品質な製品が製造でき、現場の工期短縮が図れることなどが評価され業績を伸ばす。創業者の経営判断が、後の発展を支える礎となったのである。

近年業績が伸びているのは、地中に埋設して溜め池から用水路に水を引く「底樋」。かつて

は木製のものが使われていたが、東日本大震災を契機に、地震に強く工期が短縮できる点などからプレキャスト製品が認められることとなり、開発から30年越しのヒット商品となった。

同社の手掛ける仕事は9割が公共工事であり、国や自治体の政策によって需要が大きく左右される。公共工事の削減が相次いだ時には厳しい経営に陥ったこともあったが、「私たちの製品が社会のインフラを支え、人々の生活を守っている」という社員の自負が会社の発展を支えてきた。

1人の100歩より 100人の1歩

平成29年に2代目社長の父が急逝、突如林

美佐氏に後継者として白羽の矢が立つ。しかし美佐氏は、家業については全くの未経験。専業主婦で2歳の幼子を抱えていた。何よりもそんな自分がトップとなって取引先や社員はついてきてくれるのか、美佐氏は逡巡するが、「後を継ぎ、会社を守ってほしい」という亡き父の残した言葉に覚悟を決める。

令和元年12月に社長に就任後、まず着手したのはデジタル化だった。その背景には、社長就任前、社業を学ぶために営業所の事務員として勤務していた経験がある。いち事務員の立場で仕事に携わっていると、取引先からのクレームや保守的な企業風土に対する社員の不満など生の声が嫌でも飛び込んでくる。

「お客様はこうしたこと困っているのか」「職場環境はこんなふうに変えた方がよいのでは」。林氏の中で気づきが積み重なっていく。自身も子育てと仕事の両立のさなかで改革の必要性を実感していた。加えて、結婚前に働いていた会社ではデジタル化が進んでいて、その可能性も理解していた。「社長業の経験や先入観のない私だからこそできることがある」。林氏は経営者としての思いを強くしていく。

まずは携帯電話による勤怠管理システムや受注システムを導入、スケジュールのオンライン共有、ウェブ会議やクラウド型の経費精算システムなども次々と採用し、業務の効率化を図る。矢継ぎ早に進む改革に社内戸惑いは広がったが、「1人の100歩より100人の1歩。皆さんと手をつなぎ進んでいきたい」と宣言、社員に意見を求め、社員から学び、協力を仰ぐ姿勢を貫くことで、その意識は浸透していった。こうした取り組みによって、昨年2月、「岡山働き方改革パイオニア企業」にも選出される。

部署横断の様々なプロジェクトチームも作った。総務だけでなく、営業や工場、管理、技術などで横断的に組織した採用チームでは、各部門の現場の声を反映した採用活動を実施。

仕事のイメージづくりには活かされて就職希望者が増えたほか、ミスマッチを防ぐことで新入社員の定着にもつながった。

この他にも人材育成やホームページのチームなどが活動。「社員が自分で考え、自分の色が出せる職場にしたい」との想いで、林氏は社長業に取り組む。

自己治癒コンクリートで 脱炭素に貢献

コンクリート業界でも、脱炭素社会へ業界として取り組もうという動きが始まっている。その核となりうるのが自己治癒コンクリートだ。

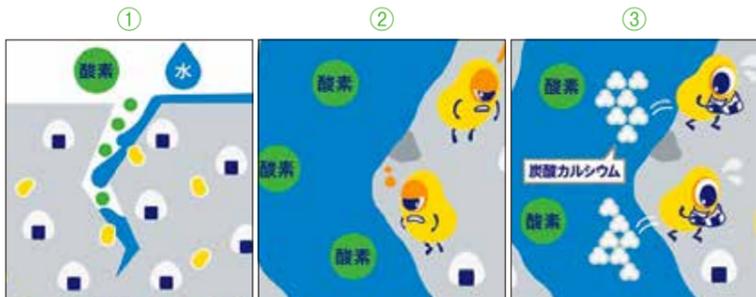
コンクリートは経年によって中の鉄筋が錆びて膨張し、内側からひびが入り破裂するという事案が起きる。自己治癒コンクリートは、バクテリアとその餌となるポリ乳酸を練り込んだ製品で、ひび割れた箇所をバクテリアの働きで修復することができる。補修コストが減り、更新時期を遅らせることで製造にかかる二酸化炭素量が減少し、脱炭素につながるものだ。

同社ではこの技術の普及に取り組み、今年度の「中国地域ニュービジネス大賞」の優秀賞を受賞した。他にも牡蠣殻の利用や高炉スラグを使った低炭素型製品の開発にも取り組み、脱炭素への貢献を目指す。

西日本豪雨などの自然災害などが頻発するなか、インフラ整備を担う同社の役割は大きくなってきている。他方で、人口減少に伴い、現場で働く人の減少も否めない。こうした環境下で、将来的にはロボットを活用した対応も視野に入れている。

林氏は「社員が誇りを持てるよう、弊社の持つ優れた技術を広く社会に知ってもらいたい」と語る。そのうえで、社員とともに1歩ずつ、地域に貢献する100年企業を目指していく。

【自己治癒コンクリートの仕組み】



①コンクリートに入ったひび割れから雨水や酸素が入ってくる②その水や酸素の影響でバクテリアが眠りから目覚め始める③バクテリアは分裂を繰り返して、コンクリートに混ぜていたポリ乳酸が変化した乳酸カルシウムを摂取して炭酸カルシウムを排出しひび割れを埋めていく



代表取締役社長の林美佐氏は、大学卒業後、建設コンサルタント会社で9年、小児科医院に5年勤務し結婚。出産を機に専業主婦となっていた。自ら社員に意見を求め、社員から学び、協力を仰ぐことで社業の発展に力を尽くす



ため池から用水路に水を引く底樋。老朽化した底樋はため池決壊の原因となることもあり、地震にも強く、耐久性、工期が短縮できる点などからプレキャストコンクリート製品の底樋は、防災面からもその必要性が認められるところとなった



社内に長年残されていた備品などを整理した結果生まれた広いスペースを、誰でも気軽に使えるフリースペースとバーカウンタに令和3年リフォーム。部署や年代を越えた社員との交流の場となり、社内に会話が増えた